

中学校部会



広島 サンフレッチェ

「写真提供：広島県」



宮島の水中心花火

「写真提供：広島県」

第7分科会

研究主題

ICTを活用し，自ら気付き，考え，
主体的に実践する体育学習

広島市立井口中学校

日程

8:50	9:20	9:40	10:30	10:50	11:40	12:00	12:40	13:00	13:15	14:20	14:55	15:00	
受付	移動	公開授業1	休憩・準備	公開授業2	移動	昼食	学校公開	ビデオ	開会行事	研究発表	研究協議	指導助言	閉会

公開授業案内

区分	授業	場所
公開授業1	第1学年 器械運動（マット運動）	広島井口高等学校体育館
公開授業2	第2学年 体づくり運動「体力を高める運動」	広島井口高等学校体育館

学校所在地



交通機関

JR山陽本線利用の場合
広島駅～新井口駅下車
乗車時間12分 学校まで徒歩15分

広島電鉄利用の場合
広島駅～井口駅下車
乗車時間45分 学校まで徒歩5分

自家用車利用の場合
国道2号線から広島井口高校左折

広島市立井口中学校



所在地：〒733-0841 広島市西区井口明神二丁目12-1

連絡先：TEL (082)277-5747 FAX (082)279-8057

E-mail：inokuchi-j@e.city.hiroshima.jp

H P：http://www.inokuchi-j.edu.city.hiroshima.jp/

校長：中野 登

生徒数：23学級（内特別支援学級2）

◎学校教育目標

「心身ともにたくましく、自ら考え、実行できる心豊かな生徒の育成」

◎学校紹介

本校は、昭和46年頃から、広島市が進めた西部開発事業の一環として埋め立てられた広島市西部の埋め立て地に昭和53年4月1日、広島市立庚午中学校から分離開校した中学校です。広島市の西部に位置し、交通の便は極めて恵まれており、JR山陽本線、広島電鉄の路面電車、国道2号線（通称：宮島街道）が近くを走っています。本校周辺は、名勝「宮島」ゆかりの井口小己斐の明神や公園が近くにある閑静で恵まれた環境の中に位置する学校です。

校訓「心豊かな実行の人」と教育目標「心身ともにたくましく、自ら考え、実行できる心豊かな生徒の育成」を目指してします。

また、手入れされたきれいな学習環境の整備、学習習慣の定着、基礎・基本の学力の定着、部活動の活性化を図り、活力ある文武両道の学校を目指しています。

平成21年から、文部科学省委託「教育ICT化支援校」として全学級に電子黒板を配置し、平成22年から4年間は「授業改善推進校」として授業改善に努めてまいりました。

広島市立井口中学校

1 研究の構想

(1) 研究主題

ICTを活用し、自ら気づき、考え、主体的に実践する体育学習

(2) 研究主題設定の理由

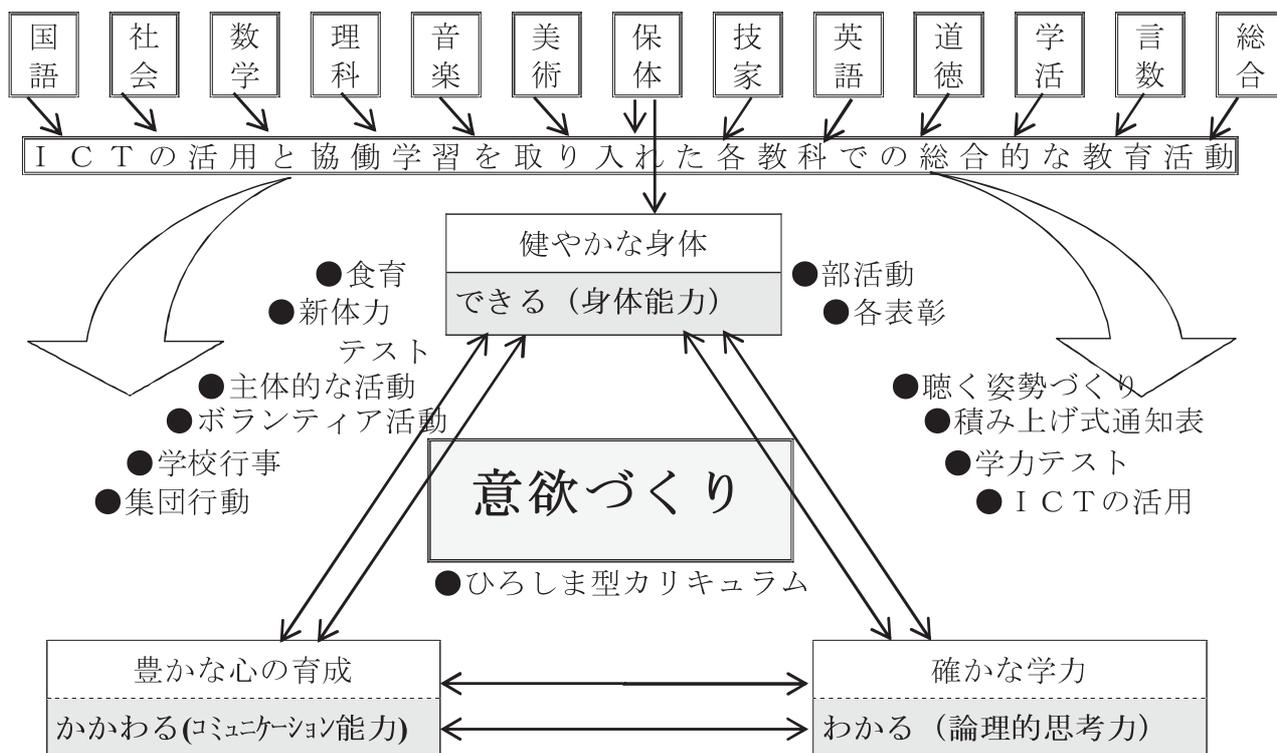
中学校学習指導要領解説保健体育編の改善の基本方針の中で、体育については、「体を動かすことが、身体能力を身に付けるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通してコミュニケーション能力を育成することや、(中略)論理的思考力をはぐくむことにも資することを踏まえ、それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、基礎的な身体能力や知識を身に付け、生涯にわたって運動に親しむことができるように、(中略)指導内容を整理し体系化を図る」と示されている。この改善の基本方針を受け、本大会の主題にも「自ら考えたり工夫したりする力を育成する」ことが掲げられていることから、本校では、生徒自らが自己や仲間の課題に気づき、仲間と互いにかかわり合いながら学習する中で、自己や仲間の課題の解決方法を考え、より主体的に学習することができる生徒の育成を目指し、研究を進めてきた。

本校の生徒の実態としては、各教科の学習や学校行事に意欲的に取り組んでおり、生徒会活動や部活動も活発である。同様に、保健体育科の授業においても、生徒は意欲的に取り組むことができ、「関心・意欲・態度」については、おおむね満足できる状況が見られる。一方、これまで学習内容を学習場面に適用したり、活用したりする力である「思考・判断」については、課題が見られ、運動の行い方や改善方法などについては理解しているものの、それらを活用して自己の課題に応じた改善方法を見いだすことに苦手意識を持っている。

そこで、本校の具体的な取組として、運動の観察場面などで、ICTを活用し、仲間の演技からよい動き方を見付けたり、自己の演技と仲間の演技の違いを比較したりすることで、自己の取り組むべき技術的な課題や改善点を明確にするなど、知識を実践的に活用する学習活動のより一層の充実を図り、「自ら練習方法を考えたり工夫したりする力」を高めていきたいと考えている。また、協働学習を取り入れ、互いの動きを観察し、運動のコツを考え合ったり、動き方や練習の仕方を教え合ったりするなどして、コミュニケーション能力の育成を図るとともに、学習を深め合う学習活動として活用していきたいと考える。

このように、運動についての知的な理解・認識に関わる「わかる」という側面、仲間と一緒に質の高い喜び・楽しさや動きのコツを共有したり、学び方を身に付けたりする「かかわり合う」という側面が相互にからみ合い、運動への関心や意欲が高まることで、運動に対してより主体的な運動や取組に発展し、その結果、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育成できると考え、本研究主題「ICTを活用し、自ら気づき、考え、主体的に実践する体育学習」を設定した。

また、こうした実践は、保健体育科の授業だけにとどまらず、各教科の学習活動で、ICTを活用したり、日常的に協働学習を取り入れるなど、「井口中スタンダード」という授業スタイルを確立してきた。このように、学校教育活動全体を通じて、各教科が相互に関連し、総合的に教育活動を展開することで、「確かな学力」「豊かな人間性」「健康・体力」のバランスのとれた力、すなわち、「生きる力」を身に付けられるものとする。(図1)



【図1】総合的な教育活動構想図

(3) 研究の仮説

研究仮説として、以下の2つの課題設定を行った。

ア：発達段階を踏まえた指導と評価のあり方

発達段階を踏まえた指導と評価のあり方を検討するため、教師たちが協働的に学習成果を俯瞰するための単元計画の構造化を提示することを目指した。なお、この取組は、中学校3年間あるいは年間の生徒たちの学びのプロセスに対する説明責任として位置づけられる。

イ：運動への関心や意欲を高め、自ら考え工夫する力を身に付ける指導方法の工夫

生徒たちの運動への学習意欲を喚起するために、ICTを活用し、運動についての知的な理解・認識を深めたり、協働学習を取り入れ、仲間と共に質の高い喜び・楽しさや動きのコツを共有するなどの指導方法の工夫を目指した。その工夫により、生徒たちは、より主体的な運動や取組に発展することで、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育成することができると考えた。

2 研究内容

(1) 発達段階を踏まえた指導と評価のあり方

本校では、研究推進チームを立ち上げ、これからの体育授業において生徒たちの発達段階を踏まえた指導と評価の一体化を明確にするため、構造的に単元計画を作成することとした。その取組みは、広島市中学校教育研究会保健体育部会にも波及し、広島市として統一した様式を提示することで、64校全ての学校から提出された単元計画例を編集し、全ての運動領域の単元計画を掲載した冊子を作成した。【図2】に示している単元計画は、本校が作成した長距離走の単元計画例である。



長距離走(駅伝) 指導計画(全学年 10時間)										
時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ねらい	○学習の流れを確認しよう。 ○現在の自分もっている力を確認し、課題を明らかにしよう。 ○これまでの学習内容を確認して、単元の目標を立てよう。		○自己に合ったペースを維持して走ろう。 ○グループで自分や仲間の動きを観察し、自己の技術的な課題を明らかにしよう。		○一定の距離を走り、自己やグループの記録に挑戦しよう。 ○路上競技を継続して楽しむための自己に合った走り方を見付けよう。			○記録会を設定し、学習の成果を確認する。		
学習の流れ	○長距離走の特性を理解する。 ○分組した役割を果たす意義を理解する。 ○健康・安全の留意点を確認する。		○長距離走の特性に応じた動きの確認を行う。(既習事項の確認) ○学習した動きを意識して、記録に挑戦する。		○リズムカールに腕を振り、カミのないフォームで軽快に走ること。 ○よりよい走りにつながる呼吸法を取り入れ、走ること。 ○運動観察の方法を理解する。(自己観察、他者観察など) 言語活動の充実 ○仲間の学習を支援する			○記録会を設定し、学習の成果を確認する。		
0	1 オリエンテーション ・これまでの学習した内容を確認する。 ・学習のねらい、進め方、役割分担、学習カードの使い方について理解する。		○集合・整列(列)の増減 ○準備運動(井口体操) ○補強運動 ○ランニング ○健康観察 ○用具や場の準備							
10	2 1000m走の計測をする。 ・1000m走を計測し、現在の走力を把握する。	1 各グループで動きながらの動きの確認 ・上下動の少ないリラックスした走りをする。 ・腕に余分な力を入れないことを意識する。 ・自己に合ったピッチとストライドの確認を行う。	1 自己の課題に応じた走り方を身に付ける。 ・カミのないフォームを身に付けるための練習を行う。(姿勢、呼吸法、ピッチやストライド、腕振りなど)	1 これまでの記録を振り返り、選択したコースの見直しを図る。 2 自己の課題に応じたコースを選択し、新たなグループを作る。	2 自己の課題に応じたコースを選択し、新たなグループを作る。 3 自己やグループの課題に応じた練習方法を実践する。 ・カミのないフォームを身に付けるための実践(姿勢、呼吸法、ピッチやストライド、腕振りの改善を意図した練習)			2 記録会を開催し、自分やグループの伸びを確認する。 3 単元を振り返り、陸上競技とのかかわり方について考える。		
20	3 昨年度の記録と比較する。 ・これまでの学習経験を振り返るとともに、自己の課題を確認する。	2 確認した動きを意識して一人1000m×3人によるミニ駅伝を行い、自己の記録を計測する。 【共通課題】 ・グループの仲間の記録の変化に気づくこと。 ・計画帳など、グループ内での役割を確認すること。	2 学習した動きを意識して一人1000m×3人によるミニ駅伝を行い、自己の記録を計測する。 【共通課題】 ・グループで仲間の記録や動きの変化に気づくこと。 【コース1の目標】 ・学習した運動の行い方を意識し、一定のペースを保ちながら、最後まで走り続けること。	4 練習した動きを意識して一人1500m×3人によるミニ駅伝を行い、自己やグループの記録を計測する。 【共通課題】 ・グループで仲間の記録や動きの変化に気づくこと。 【コース1の目標】 ・学習した運動の行い方を意識し、一定のペースを保ちながら、最後まで走り続け、自己やグループ合計の記録に挑戦すること。 【コース2の目標】 ・学習した運動の行い方を意識し、他のグループとの競争を楽しみながら、自己やグループ合計の記録に挑戦すること。	4 練習した動きを意識して一人1500m×3人によるミニ駅伝を行い、自己やグループの記録を計測する。 【共通課題】 ・グループで仲間の記録や動きの変化に気づくこと。 【コース1の目標】 ・学習した運動の行い方を意識し、一定のペースを保ちながら、最後まで走り続け、自己やグループ合計の記録に挑戦すること。 【コース2の目標】 ・学習した運動の行い方を意識し、他のグループとの競争を楽しみながら、自己やグループ合計の記録に挑戦すること。					
30	4 一定のペースを維持し、記録に挑戦するコース【コース1】、自己の記録を短縮することに挑戦するコース【コース2】に分かれて、各コースで人数のグループを作る。	3 確認した動きを意識して一人1000m×3人によるミニ駅伝を行い、自己の記録を計測する。 【共通課題】 ・グループの仲間の記録の変化に気づくこと。 ・計画帳など、グループ内での役割を確認すること。	3 実践した走り方と記録の変化を振り返り、改善すべきポイントを見付ける。	5 実践した走り方と記録の変化を振り返り、改善すべきポイントを見付ける。	5 実践した走り方と記録の変化を振り返り、改善すべきポイントを見付け、次時につながる効果的な練習方法を計画する。					
40										
50										
評価	① (観察)				③ (観察)			② (観察)	② (観察)	① (観察)
思考・判断	① (学習カード)						② (学習カード)	③ (学習カード)		① (学習ノート)
技能				① (観察)				① (観察)		
知識・理解	①② (学習カード)		② (学習カード)						① (学習カード)	① (レポート)

【図2】本校で作成した長距離走の単元計画例

(2) 運動への関心や意欲を高め、自ら考え工夫する力を身に付ける指導方法の工夫

ア ICTの活用(気づき, 考える)

文部科学省(2011)「教育の情報化ビジョン～21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して」によると、21世紀を生きる子どもたちに求められる力を育む教育を行うためには、子どもたちの学習や生活の主要な場である学校において、教育の情報化を推進していくことが必要である。また、ICTを活用した授業によって「一斉学習」、「個別学習」、「協働学習」のそれぞれの学習場面が相互に組み合わせられた学びの場が形成される「学びのイノベーション」(学びのイノベーション実証研究報告書, 2014)を推進していくことが重要であるとしている。

そこで、本校の保健体育科では、マット運動や体づくり運動などでタブレットやTV、PCなどのICT機器を適用した研究内容で実践を進めていくこととした。マット運動では、生徒たちが自己や他者の動きを分析することで、自己の取り組むべき技術的な課題や改善点を明確にすることが重要である。また、体づくり運動では、仲間と交流しながら、自己や他者の身体の変容に気付くことで、どのように身体を調整できるのかが肝要である。そのような授業改善の方向性に対して、ICT機器の活用に対する効果を検証することとした。

イ 協働学習(学習意欲の喚起)

本校の取り組みの特徴は、学校をあげての研究であり、全教科を通じて協働学習の考え方を基盤に置いて、教育実践を蓄積しながら生徒たちの学習意欲の喚起に従事している点にある。本校における協働学習とは、生徒が主体的かつ自立的に学習し、確かな知識を得て、仲間と協力して課題を解決する力を効果的に身に付けていくための手段である。

そこで、「わかる」ための体育授業を進めていく上でも、仲間同士の学び合いが有効で

あることを踏まえ、協働学習を取り入れることにした。このような課題を補うことができる協働学習の学習形態として、ペア学習やグループ学習が有効であると考えた。



3 実践事例

(1) マット運動

マット運動は、「できる」「できない」の結果や個人差が明確にあらわれる種目である。そこで、「できた」という喜びを味わわせるためにも、自分で選んだ技を美しく行うことや、技と技をなめらかにつなげることを大切にして授業を進めた。

また、協働学習を積極的に取り入れることで、「～君のおかげで『できた』『分かった』『楽しかった』」と思える信頼関係や、仲間とともに意欲的に取り組む姿勢などを養えるように指導した。ICTの活用については、タブレットを積極的に活用し、課題に応じた練習方法を考えたり、技の改善すべきポイントを見つけ出したりすることができるようにさせた。具体的には、各技の動画見本を50インチTVやPC画面に映し出し、自分の動きと見本の動きを瞬時に比較できるようにした。また、各技の画像とポイントを記した拡大図の掲示や、つまずきに対する練習方法等を詳細に記した学習ノートなども準備した。



(2) 体づくり運動

体づくり運動は、まず学習カードを用いて生徒一人ひとりが体力プロフィールを作成するところから始めた。新体力テストの結果をもとにして自らの体力を自己診断することで、自分自身の課題を見付けることから始めた。そして、『気持ちがゆったりしているか』『体を動かすことが楽しいですか』など精神的な面も振り返ることで心身ともに健康であるかの確認をさせた。その他にも1週間の食事メニューや睡眠時間、運動時間も記入させた。日々の生活で取り組むことができそうな20分運動プログラムを考えさせて各自で実践し、心と体の変化に気付かせるようにした。

本校では、各種目の主運動に繋がる運動事例を収録したDVDを授業で活用している。その運動事例を基に、自己や仲間の体力を高める運動は何かを考え、選択し、実践してみることで、自己の体力課題に応じた運動を見付けることができるようにしている。また、各領域の種目では男女別に授業を展開しているが、この体づくり運動では学級づくりに繋がることを考え、男女共習とした。



主運動に繋がる運動事例を収録したDVDのメニュー画面

(3) 長距離走

長距離走において、男子1500m走、女子1000m走は単調な種目でなかなか興味・関心がわかない。そこで、協働学習が積極的に展開できるよう、3人1組を一つのチームとした駅伝形式の長距離走として学習内容を再構成することで、チームで協力して記録を縮めるリレー特有の楽しさを味わうことができるなど、学習意欲の喚起につながると考えた。

まず、チーム分けについては、新体力テストの結果を参考に、3名の合計タイムがほぼ同じになる様に3人1組のチーム分けを行った。次に、チームの合計タイムをいかに縮め

ることができるか視点に、ペース配分やフォームの改善点を考えさせるなど、チーム内で協力して考え合う場面を設定した。さらに、自己の記録に挑戦することに意欲的になるよう、練習場面で目標記録に注目させた10分間走を取り入れた。ここでは、全国平均を超えることを目標に、1周250mのトラックで25m通過するごとに1ポイントが加算され、1周で10ポイント、10分間で10周走ると100ポイントを獲得できる仕組みとした。ラップタイムの基準を設定する際、1周の目標タイムを男子は1500m走、女子は1000m走の新体力テストの全国平均から割り出し、3年生男子については、1周のペースが約60秒となるよう設定した（表1参照）。

【表1】全国平均（3年男子）の記録から算出したラップタイムの基準（1周60秒のペースの場合）

距離	250m	500m	750m	1000m	1250m	1500m	1750m	2000m	2250m	2500m
タイム	1分	2分	3分	4分	5分	6分	7分	8分	9分	10分
1周ラップ	60秒	60秒	60秒	60秒	60秒	60秒	60秒	60秒	60秒	60秒
得点	10P	20P	30P	40P	50P	60P	70P	80P	90P	100P

4 実践の記録

(1) ICTや協働学習を活用したマット運動と体づくり運動の実践の成果

ICTや協働学習を活用したマット運動の授業において、1年生女子の単元後のアンケート結果から、楽しく意欲的に活動し、主体的に練習に取り組めたことがうかがえる。また、自己の課題に気づき、解決していくことで、技能の向上に繋がったと考えられる【図2】。



【図2】ICTや協働学習を活用したマット運動の授業の成果（1年女子）

以下は、マット運動の単元後に、生徒に自由記述させた記述例を紹介する。

生徒A：「小学校のときもマット運動をやったけど、TVで動画をみたり、タブレットを使ったりしていなかったので、自分にもできる技は限られていた。練習をやるときも先生に教えてもらうことしかなくてあまりやりたいと思っていなかった。でも、中学校でマット運動をやってICTを使うことができ練習も楽しく分かりやすかった。」

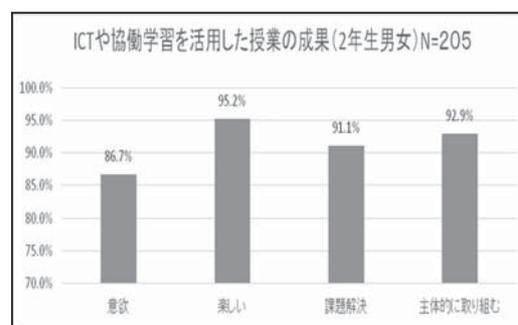
生徒B：「タブレットがあったのが大きかったと思います。自分の悪い所が明確になって練習ができたのでとても良いと思いました。」

生徒C：「やはりグループの方がはやく成長できると思いました。アドバイスをしてくれたり、支えてくれたりしたのが、とても大きかった。」

生徒Aの記述は、ICTの活用そのものが学習意欲の喚起につながっている。また、生徒Bは、自己の動きを分析し、練習に活かすことで、意欲の向上につながっている。生徒Cは、仲間と協力しながら問題解決に取り組んでいることがわかる。

次に、ICTや協働学習を活用した体づくり運動の授業において、2年生男女の単元後の

アンケート結果から、主体的に練習に取り組み、自己の課題に応じた体力向上の取り組みを考え、行うことで、課題解決に繋がったことがうかがえる。また、楽しく活動できたものの、継続的な意欲の向上までには至らなかったのではないかと考えられる【図3】。



【図3】ICTや協働学習を活用した体づくり運動の授業の成果（2年男女）

以下は、体づくり運動の単元後に生徒に自由記述させた記述例を紹介する。

（タブレット使用に関して）

生徒D：「説明では良く分からなかったところも動画で学ぶことで分かりやすくなり、できなかったことができるようになりました。また、自分の動きと比べることができるので、自分の欠点を知ることができました。」

生徒E：「全体で見本をしてもらって見るよりも、タブレットで見たほうが、見ている人が班員だけなので見やすい。また、それぞれしたい取り組みが班によって違うので、タブレットだと自分達で取り組める。」

生徒F：「運動の仕方が映像で見られたので、細かいところまで良く分かって、運動を決めて取り掛かるまでの時間が早くできたと思う。また、どんなことをするか決めるときに、どういうところを使ってどういうところが鍛えられたかということまで分かったから便利だった。」

（協働学習に関して）

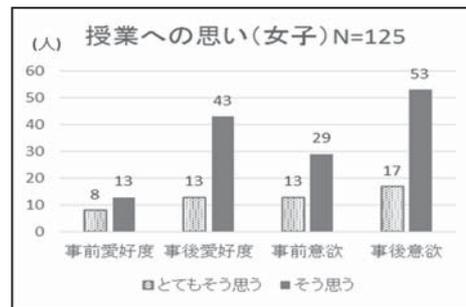
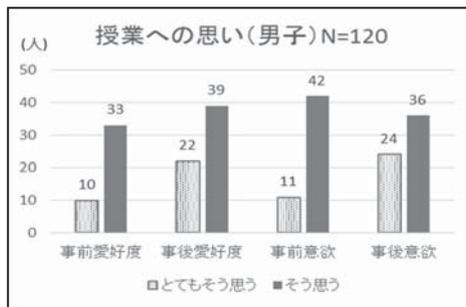
生徒G：「いつもと雰囲気違って、新鮮な気持ちで取り組むことができました。保体の授業以外の時間でも話す機会が増え、日常まで楽しくなりました。スポーツを通して仲間が増えるということはこういうことなんだと初めて実感しました。」

生徒H：「男女のグループで活動することで、色々な人と仲良くなれた。また、より楽しくもっと体力を向上させるにはどうすればよいかなど話し合うことによって、色々な意見が出てよかった。一人で活動するよりもグループで活動するほうが楽しかったし、色々な意見を交流することができたと思う。」

タブレットを使用することによって、1つの情報をみんなで共有し、短時間で情報を得ることができるので、運動量を確保することができた。また、協働学習では、自己の体力等の課題に対してグループが協力して運動に取り組むことで、仲間同士のつながりや関わり合いが多く見られた。男女ともに主体的に楽しく授業に取り組めた。

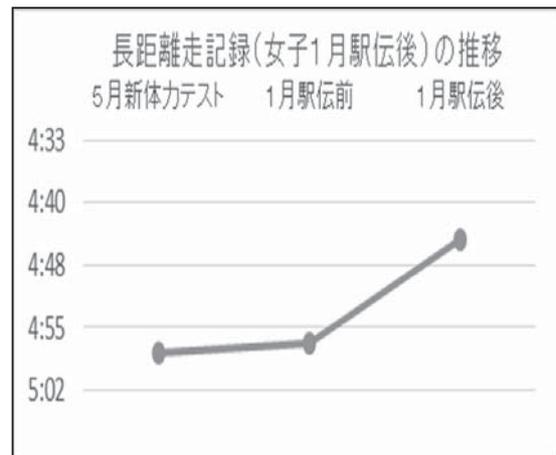
（2）長距離走

意欲づくりのための駅伝の授業において、1年生の単元の事前・事後のアンケート結果から、愛好度、意欲ともに顕著な向上がみられた。(図4)



【図4】単元前後における長距離走の男女の授業への思いの推移（1年生男女）

その理由として、「仲間が応援してくれたり、声をかけてくれると嬉しくてやる気が出るから」や「ペースが速くなったり、タイムが上がると嬉しかったし、もっと速くなりたいと思ったから」などの意見が多く挙げられた。練習の際には、グループ内で、ラップタイムを生徒自ら計算し、一定のペースで走ることや、個々にあったペースアップのタイミングなどを話し合い、改善できるように考えて取り組んだ。記録測定の際には、グループ内でペース配分やフォームなどの明確な指示や、応援、励ましの声が常にかけてされていた。また、疲れてきた生徒がいると、同グループの生徒たちが、自然と並走するなど、関わり合いの場面が多くみられた。さらに駅伝の取り組みは、意欲の向上のみにとどまらず、記録の向上にも繋がった。5月に行った新体力テストでは、全国平均を下回る結果であったが、駅伝の授業の最後に測定した記録は、ほとんどの生徒が自己記録を更新し、全体の平均が平成25年度の、3年生の全国平均を上回る結果となった【図5】。特に、C評価の手立てを必要とする生徒たちの記録が大幅に向上したことも、協働学習の大きな成果だと考えられる。



【図5】長距離走記録【1年女子】の推移

5 研究のまとめ

(1) 成果

保健体育科の研究実践の成果について、以下の3つの成果があったと考えられる。

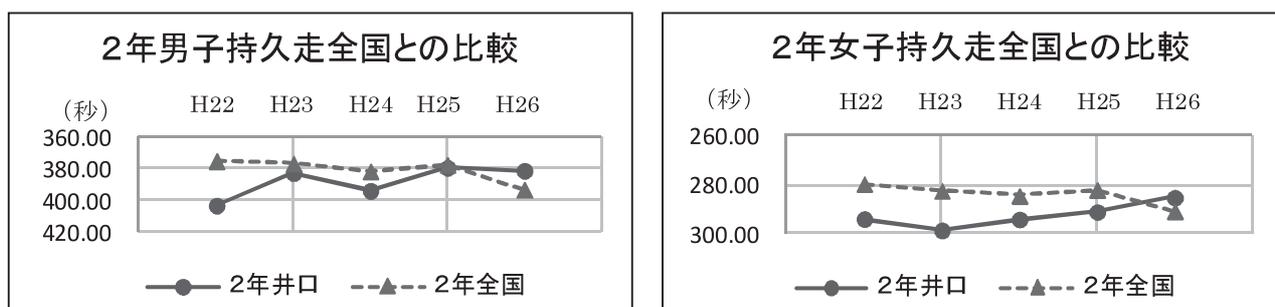
第一に、ICTや協働学習を活用したマット運動の授業を実施する中で、生徒が自己の課題に気付き、課題解決に取り組むことができるようになった結果、意欲や技能の向上に繋がった点である。具体的な手立てとしては、生徒同士がタブレット端末機でお互いの演技を撮影し、見本の図や動画と比較しながら活動することによって、自己や仲間の課題に気付くことができた。さらに、技のつまずきポイントや練習方法が書かれた学習ノートを自己の課題と連動させながら、課題を解決するための練習を選択し、実践した。ICTを活用することで、自己の動きを客観的に捉え、正しい動きに近づけるため、自己のもっている知識を活用することが生徒の主体的な学習活動をうみ、技能の向上、さらには学習意欲の

向上に繋がったと考えられる。

第二に、ICTや協働学習を活用した体づくり運動の授業を実践する中で、1つの情報をみんなで共有し、短時間で情報を得ることで、活動時間を確保することができた。また、自己の体力等の課題に対してグループが協力して運動に取り組むことで、仲間同士の繋がりがや関わり合いが多く見られた。具体的な手立てとしては、本校で導入している全種目の主運動に繋がる動きづくりの動画が入ったタブレット端末機を活用し、その中から自己の課題にあった運動を選択して課題克服に向けてグループで実践することによって、活動時間が確保できるとともに、仲間と楽しく協力して運動できる喜びが主体的な学習につながったと考えられる。

第三に、協働学習を取り入れた長距離走の授業を実施する中で、愛好度、意欲、さらには記録の向上が見られた点である。具体的な手立てとしては、グループ内でペース配分やフォームなどの明確な指示や、応援、励ましの声かけによって、学習意欲の喚起につながった。一人では分かりにくい課題を、仲間にアドバイスをもらい改善できたこと、グループで走っているという一体感が、技能の向上、学習意欲の向上につながったと考えられる。

また、10分間走の練習を積み上げてきた結果、【図6】にあるように平成26年には、2年生の男女とも全国平均を上回ることができた。



【図6】井口中学校と全国平均の持久走タイムの推移の比較（2年生男女）

(2) 課題

今後の課題としては、以下の5点である。

- ① 指導と評価の一体化を図るための単元計画は、指導する上で最も重要視するものであるため、常に見直し、主体的に生徒が実践できるように計画する必要がある。
- ② タブレット使用は、晴天下では見にくいという欠点がある。グラウンドでも使用できるようにテント設営などで影をつくり見えやすい環境を整備する必要がある。
- ③ 実技種目や保健分野でタブレットを使用した誰もが効果的に授業を実施できる実践事例をつくりあげ、授業の充実を図る必要がある。
- ④ ICTを活用する時には、運動量とのバランスを考えて授業を展開する必要がある。
- ⑤ 個から集団そして個へとねらいをもって協働学習をより意図的に展開することで、生徒の関わり合いをより豊かなものにしていく必要がある。

第8分科会

研究主題

仲間とともに運動の楽しさを味わう体育学習

廿日市市立四季が丘中学校

日 程

9:00	10:00	10:50	11:10	12:00	13:00	13:15	14:30	14:55	15:00
受 付	公開授業 1	移 動	公開授業 2	昼 食	開 会	研究 発表	研究 協議	指 導 助 言	閉 会

公開授業案内

区 分	授 業	場 所
公開授業 1	第 1 学年男子 球技（ネット型：バレーボール）	体育館
公開授業 2	第 1 学年女子 武道（剣道）	体育館

学校所在地



交通機関

最寄駅

- ・ JR「宮内串戸」駅下車
シャトルバスへ乗換

その他

- ・ 広電「宮内」電停下車
JR「宮内串戸」駅へ 徒歩 5 分
- ・ 山陽自動車道廿日市インター出口より
廿日市市内方面へ 学校まで車で 12 分

廿日市市立四季が丘中学校



所在地：〒738-0036 広島県廿日市市四季が丘2-1-1

連絡先：TEL (0829) 38-3371 FAX：(0829) 38-3394

E-mail：shikigaoka-j-soshiki@hatsukaichi-edu.jp

H P：http://www.hatsukaichi-edu.jp/shikigaoka-j/

校長：飯田 美智子

生徒数：325名

◎教育目標

新たな夢に向かって 学び続ける



◎学校紹介

本校は平成3年、廿日市市南部の団地に開校しました。標高約130メートルの丘陵に位置し、南東方向には瀬戸内海を一望の下に見下ろし、南西の世界遺産安芸の宮島から北東の広島市街、広島湾の島々や呉市街地をも望むことができます。

校章は創立時の3年生が美術の授業活動でデザインしたものから選ばれたものです。また、本日共に授業する廿日市市立阿品台中学校とは、廿日市市立七尾中学校から分離した姉妹校です。

廿日市市立四季が丘中学校

1 研究の構想

(1) 研究主題

仲間とともに運動の楽しさを味わう体育学習

(2) 研究主題設定の理由

中学校学習指導要領保健体育編（平成20年3月告示）においては、「心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てること」が目標の一つとして示されている。また、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うことを重視し、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに、発達の段階のまとまりを考慮し、小学校、中学校及び高等学校を見通した指導内容の体系化が図られている。

本校の生徒は明るく素直であるが、「アセス【注1】」などの各種調査から、「集団の中での自己存在感が低く、主体性にやや欠ける」という課題が明らかになった。この課題の解決に向けて、昨年度は全教育活動を通して生徒指導の三機能を活かす取組について研究をすすめ、特に生徒同士の「かかわり合い」について追究してきたところである。

これらのことを踏まえ保健体育科では、第1学年及び第2学年において指導内容を定着させる中で、様々な運動の特性に触れさせるとともに、第3学年で自ら選択できるよう履修方法を工夫している。また、生徒同士がしっかりかかわり合う場を設定し、運動の楽しさや喜びを味わわせるよう取り組んできた。

しかし、昨年本校で行った「体育・運動に関するアンケート」によると、「体育の授業は楽しい」と回答する生徒はほぼ100%であるのに対し、自己有能感についてのアンケートによる身体的有能さの認知に関する質問（表1）に対しては、「自分は運動能力が優れていると思う。(14.2%)」「運動に自信を持っている。(12.2%)」「たいていの運動は上手にできる。(20.3%)」という結果であった。

以上のことから、学校全体で取り組んできた「かかわり合い」活動を基盤として、集団の中での自己存在感を高め、主体的に取り組む指導方法の工夫によって、かかわり合いの中で「わかる」「できる」という実感を持たせることで、体育学習についての自己有能感が高まると考え本研究主題を設定した。

表1 「自己有能感についてのアンケートより」

Q1. 自分は運動能力が優れていると思う。				
←肯定的評価	中間	否定的評価→		
0人	7人	21人	12人	8人
0.0%	14.2%	42.8%	24.4%	16.3%

Q2. 運動に自信を持っている。				
←肯定的評価	中間	否定的評価→		
1人	5人	20人	13人	9人
2.0%	10.2%	40.8%	26.5%	18.3%

Q3. たいていの運動は上手にできる。				
←肯定的評価	中間	否定的評価→		
1人	9人	21人	12人	5人
2.0%	18.3%	42.8%	24.4%	10.2%

【注1】「アセス」=学校適応感尺度（ASSESS）学校生活場面への適応に係る子供の認識を見とり、的確な支援をするためのアセスメント（見立て）

(3) 研究仮説

仲間とかかわり合いながら主体的に学ぶ生徒を育成するため、次の指導の充実によって、体育学習における自己有能感が高まるであろう。

- ① 指導内容、指導方法、学習評価を明らかにした指導と評価の計画の作成
- ② 協働的な学習「かかわり合い」の活用
- ③ 生徒の実現状況を把握し、指導に生かすための、学習評価情報を効果的・効率的に収集するための学習カードの工夫

2 研究内容

(1) 指導内容、指導方法、学習評価を明らかにした指導と評価の計画の作成

生徒の発達段階を踏まえ、学習の流れを工夫するとともに、学習評価と一体となった緻密な指導計画を作成した。

(2) 協働的な学習「かかわり合い」の活用

生徒が主体的・積極的に学ぶための協働的な学習について、その効果を検証した。ただ単に仲間とかかわり合いながらグループ活動を行うという学習にとどまることなく、協働し、新たな発見をしたり、知識を活用したりできるような思考・判断を促す指導方法の工夫について研究・検証した。

また、生徒が運動に興味・関心をもつとともに、仲間とかかわり合う中で「楽しい」と感じるよう、態度の指導内容を実現するための効果的な指導方法を工夫した。

(3) 学習評価情報を効果的・効率的に収集するための学習カードの工夫

学習評価は、学習指導要領の目標の実現状況を把握し指導の改善に生かすものである。学習状況を分析的に見る「評価の観点」については、成績付けのための評価だけでなく、指導の改善に生かすことを重視し、4観点のバランスやその評価方法について研究した。

3 実践事例 <剣道の授業を中心に>

(1) 生徒の発達段階を踏まえた指導計画の作成

次の「図1」は、第1学年の武道(剣道)の単元計画である。指導内容全体の流れとともに、各観点の評価を確認しながら指導を進められるよう構成した。生徒の学習状況を適切に評価し、指導の改善に生かすという視点を重視して指導と評価の一体化を図るよう工夫した。

図1 単元計画及び評価計画(第1学年)

7 単元計画及び評価計画(12時間)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
大会主題との関係		わかる			わかる・できる			できる・かかわり合う			かかわり合う		
学習の段階	学習I 【単元の学習の見通しを立てる段階】	学習II 【基本動作を知る段階】				学習III 【思考しながら習得する段階】				学習IV 【挑戦する段階とまとめ】			
	剣道の特性に関心をもち、単元の由来を理解し、授業の心構えや進め方を理解する。	基本動作(構え、足さばき、道具の装着)及び打突の仕方と受け方を身に付け、剣道の特性に触れる。				学習した基本動作を習得するために練習の仕方を工夫する。				学習してきた技を発表する。(判定試合)			
学習内容の流れ	0 挨拶 オリエンテーション	正座・黙想・座礼 ねらいの確認・雑巾がけ等(補修運動)											
	10 ①武道、剣道の特性 高まる体力等 ②剣道用具の確認	①剣道体験 足さばき鬼ごっこ	①剣道体験 足さばき鬼ごっこ	①防具着装(垂れ袖) ※装着時間計測(2分以内完了)			②竹刀を持って足さばき (ヤナシ画面面・面、残心)			①グループ会議 ・作戦、練習法 ・ポイント確認 ・出場順の確認			
	20 ③安全指導、竹刀の安全点検等	②手刀で足さばき	②中段の構えと目付、遠隔、一足一刀	③胴打ち ・胴→残心	③面(竹刀打) ・面打 ・面止 ・面→残心	③基本打ち(グループ練習) ・面、小手、胴	③面の装着 2人一組でお互いが付け合う。 (2人で4分以内装着完了)			③防具の着装 ③グループ練習			
	30 ④礼法(立礼、座礼)、進場・出入り ⑤DVD視聴	③竹刀構えの確認	④防具着装(垂れ袖)・着装、置き方	④小手打ち ・小手 ・一足一刀→小手	④面打 ⑤面抜き	④審判法の確認			④プレ判定試合			④判定試合	
	40 ⑥剣道体験 ・剣道じゃんけん ・新聞切り ・新聞ボール打ち	④竹刀で足さばき	⑤打突の仕方 打たせ方の確認 ・胴 ・面(竹刀打)	⑤面打 ⑤小手→面			⑤審判法の確認			⑤審判法の練習			
	50	防具の片付け 整理運動・本時のまとめ・評価(教師の評価、生徒の自己評価など)・学習カード記入・礼・片付け											
評価の重点	指導	指導と評価	指導	指導と評価	指導	指導と評価	指導	指導と評価	指導	指導と評価	指導	指導と評価	指導
評価標準と方法		1-①(行動観察)		2-②(学習カード)		3-①(行動観察)		4-②(学習カード)		1-②(学習カード)		2-③(学習カード)	
ICTの活用	DVD視聴	動画、P.T使用	動画、P.T使用	動画、P.T使用	動画、P.T使用	動画、P.T使用	動画、P.T使用	動画、P.T使用	動画、P.T使用	動画、P.T使用	動画、P.T使用	動画、P.T使用	動画、P.T使用
努力をよとする状況	●剣道に積極的になれる。 ●防具をつけることが面倒くない。	●グループで段取り良く練習ができる。			●打突のタイミングが合わない。 ●体さばき等の動きがぎこちない。			●剣道の歴史や特性、礼法の重要性を理解できない。					
指導の立て	○防具をつける意義を伝え、意欲を引き出す。 ○仲間との協力を促す。	○仲間の基本姿勢や基本動作を見ることの大切さを助言する。 ○練習内容について新たな視点を持たせる。			○剣道経験者や教師が元立ちし、近い位置から打ち込ませる。 ○仲間と隣で同じ動きをさせて学ばせる。			○資料などを活用し、理解を深めさせる。					

また、「図2」は、評価規準の設定に係る工夫である。第1学年・第2学年で行う剣道の履修においては、発達段階に応じて、学ばせたいことを系統的かつ明確にして指導できるようにするため、各学年で行うものと共通して行うものとに区別化するとともに学習活動に即した評価規準をより具体的に作成した。

図2 単元の評価規準（第1学年）

(●：第1学年の評価規準，○：第2学年の評価規準 ◎：共通の評価規準)

	運動への関心・意欲・態度
単元の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ● 武道の学習に積極的に取り組もうとしている。 ○ 相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとしている。 ◎ 分担した役割を果たそうとしている。 ◎ 仲間の学習を援助しようとしている。 ○ 禁じ技を用いないなど健康・安全に留意している。

単元計画及び評価計画から			
評価の重点	関・意・態	指導	○
	思考・判断	指導と評価	
	技能	指導	
	知識・理解	指導と評価	
評価規準と手法	関・意・態		1-①(行動観察)
	思考・判断	2-①(行動観察)	
	技能		
	知識・理解	4-1(学習カード)	

2時間前に指導した内容【1-①基本動作や技ができる喜びを味わい、よりよくできるようにすることに積極的に取り組もうとしている。】を2時間後に評価する。(左図点線参照)

取組への意義を説明した上で、学習機会を設け、次の1時間で形成的評価を行い、手だてを要する生徒に対しての指導を充実させた。

(2) 協働的な学習「かかわり合い」を活用した指導方法の工夫

ア オリエンテーション

協働的な学習をすすめるための意義、約束や合意を明確に示した。

- ・リーダー、記録係等一人一人の役割を決めて行うこと。(グループでローテーションを行う)
- ・自分の思いやグループで出た意見を否定せずに受け止めてまとめること。
- ・お互いにほめあうこと。

イ ねらいを明確にしたペア・グループ活動の活用

次のようなペア・グループ活動を設定し、条件や約束あるいは課題を提示して思考を深めさせるよう工夫した。

- ・ 剣道体験
- ・ 面の装着
- ・ 基本打ち (面, 胴, 小手)
- ・ グループ会議 (作戦, 練習法, ポイント確認, 出場順の確認)
- ・ グループ練習
- ・ 判定試合



<例>

	<p>剣道の3時間目の授業において、学習目標を「仲間と協力して、正しい面打ちのポイントを見付けよう」と設定した際、生徒にどのように有効打突を行えば、正しい面打ちになるのかを考えさせる場面</p>
--	---

ウ 剣道体験の運動の導入

剣道体験の運動とは、剣道の対人性等の要素を含んだゲーム感覚で行う運動である（表2）。ペア、グループ、全体など授業内容と関連させて楽しみながら行うことができる。

表2 剣道体験の運動実践例

名 称	運動の説明		ねらい（学習内容）	導入場面
ペア				
じゃんけん踏込 【注2】 アイーン切り 【注2】	左手で握手の状態から、右手でじゃんけんする。勝った方は相手の足を踏む。負けた方は後ろに下げる。		踏み込み足の動きやすり足の動き	単元の前半部分、対人性を理解させる場面
	指導効果	密接した状況で、踏み込み足や足さばきの基本を学ばせることができた。実際には、相手の足を踏みつける生徒はなかった。【生徒の感想】「本当に踏まれるかと思ったが、よけられるようにしてくれた。」		
	手拭いを長細くし、片手で額の位置に掲げる。相手は志村けんさんの「あいーン」の状態から、斜め下に降り落とす。手拭いを降り落とすと勝ち。		胴打ちの腕の動かし方や対人性	胴打ちの導入や対人性を理解させる場面
	指導効果	胴の位置や胴の打ち方の基本を学ばせることができた。【生徒の感想】「力を入れすぎず相手の目を見ながら行くと上手くできた。」		
グループ				
新聞切り 【注3】	新聞1枚を真ん中で強く折り曲げ2人で四隅を持つ。竹刀を持った相手が真ん中に振り下ろして真二つに切る。		竹刀の持ち方動かし方。力の抜き方	竹刀の持ち方の指導や動かし方の基本を学ぶ場面
	指導効果	竹刀の動かし方や力の入れ方など、竹刀の操作の基本を学ばせることができた。【生徒の感想】「新聞が切れるとスカッとした気持ちになった。力を抜いた方がうまくいった。」		
新聞ボール切り 【注2】	新聞紙を半分にして丸め、「はい」という声で投げ上げる。竹刀を持った相手は、瞬時に反応し、新聞ボールを打ち落とす。		竹刀の持ち方動かし方。打突部分の捉え方	竹刀の持ち方の指導や動かし方の基本を学ぶ場面
	指導効果	素早い動きや動く目標物を捉える動きを学ばせることでできた。高められる体力の要素を確認することができた。【生徒の感想】「ボールの中心を捉えることはむずかしかった。」		
全員				
すり足鬼ごっこ	裸足とすり足に慣れるため、人数で調整した正方形を作り、人に当たらないようにペアを捕まえる。タッチされたら鬼は交代。		対人性や混在する中での俊敏な動き	すり足の動きを作るための予備運動
	指導効果	すり足の俊敏な動きを作らせることができた。【生徒の感想】「すり足で友達を追いかけることはむずかしかったが、いつのまにかすり足ができるようになった。」		

【注2】 出典 月刊「武道」2012.12 第9回剣道のアイスブレイキングより

【注3】 出典 平成26年度広島県教育委員会学校体育スポーツ研修事業07講座 剣道指導実践講座研修より

エ ICTの活用

ICTは、「個別支援の充実」、「一斉指導の充実」、「学習評価の効果」に活かせるよう活用した。個別支援の充実では、生徒の変容を視覚化することにより、自己有能感の身体的有能さの認知を高めるよう支援した。一斉指導の充実は、本時を振り返る際、生徒の動画を



映して動作を分析した。特に改善点については動画を停止しながら説明を加えて示範したり、協議させたりして技能の向上を図った。学習評価の効果は本時の目標に迫ることができた生徒の動き、あるいは「十分満足できる」状況について共有させる場面で使用した。

オ 生徒の変容が記録できる学習ファイル（ポートフォリオ）の活用

学習ファイルにポートフォリオした学習カードを参考にしながら、提示した課題について個人思考の時間を設け、個人で考えたことを、グループで実際に実践しながら思考を深めさせた。その後、全体で発表し、その発表から改めて正しい打ち方への認識が深まるよう発問を工夫したり、講評を加えたりした。



見通しをもって学習し、ねらいの達成について振り返りながら記録を積み重ねた。単元の最後に感想を書かせた。



(3) 指導の改善に生かすための学習評価の工夫

ア 学習カード

教師が指導の過程や評価方法等を見直ししながら、より効果的な指導が行えるよう、診断的評価や総括的評価だけでなく、形成的評価も重視した。特に学習カードには、「指導のねらい」、「指導過程」、「4観点のバランス」、「評価の見とり方」等が点検でき、常に指導に活かされるものになるよう工夫した。

<学習カード>

(知識・理解)				
	月日	分かったこと・ポイント	月日	分かったこと・ポイント
剣道の特性	/		/	
高まる体力	/		/	

イ 生徒アンケート

全校生徒に、年2回全教科の授業評価アンケートを実施している。さらに保健体育科では、自己有能感についてのアンケート、また各単元の前後での質問紙による意識調査を実施し生徒の視点からも指導の改善を図った。

全校生徒授業評価質問項目

1	先生が示す「授業の目標」は、この時間に何を頑張ればよいか、何ができるようになってよいかがよくわかる。
2	先生の説明や指示は、具体的でわかりやすい。
3	授業の終わりに、今日は何を学習したかがわかる、まとめや振り返りがある。
4	授業の中で、ペアやグループ活動など、仲間とかかわって学ぶ活動や場面がある。

保健体育科における受容感「教師や仲間から受け入れられているという認知」に関するアンケート項目

1	一緒に運動しようと誘ってくれる友達がいます。
2	運動をしている時、友達が励ましたり応援したりしてくれます。
3	一緒に運動する友達がいます。
4	運動をしている時、先生が励ましたり応援したりしてくれます。

保健体育科における授業アンケート項目 <例>

1	保健体育の授業は楽しいですか。
2	保健体育の授業で、できなかったことができるようになったきっかけ、理由
3	柔道・剣道についての経験、興味の度合い、体験の希望
4	武道のイメージ

(4) 組織的な研究推進

研究実践をより確かなものにするために、校内はもとより大竹市・廿日市市教育研究会中学校部会保健体育部会の保健体育科教師により指導計画や指導内容、指導方法について交流・検討し、共通の指導計画で実践してその成果や改善点を協議した。

各校から、診断的評価に関するアンケート調査、意識調査、単元の体力を高めるための運動実践、評価計画、指導方法等を持参し、それらをまとめたり検討したりして、その単元の指導について再構築していった。

4 実践の記録

(1) 指導計画の効果

評価計画を単元計画に盛り込み授業を組み立てることで、単元の楽しさや価値に迫ることができた。学習カードと連動させ、単元のどの場面で指導し、何を評価するかを明確にしたことで、指導の途中で生徒の達成状況を見とり改善する(させる)ことができた。

<単元計画及び評価計画>

評価の重点	関・意・態	指導	→	○
	思考・判断		指導と評価	
	技能			指導
	知識・理解	指導と評価		
評価規準と表	関・意・態			1-①(行動観察)
	思考・判断		2-①(行動観察)	
	技能			
	知識・理解	4-1(学習カード)		

「関心・意欲・態度」及び「技能」については、指導後に時間をとおいて評価した。
「思考・判断」及び「知識・理解」については、その時間の中で評価した。

視点を明確にして評価した後、努力を要する生徒や、つまづいている生徒には、個別に手立てを考えて指導した。

形成的評価

<学習カードとの連動>

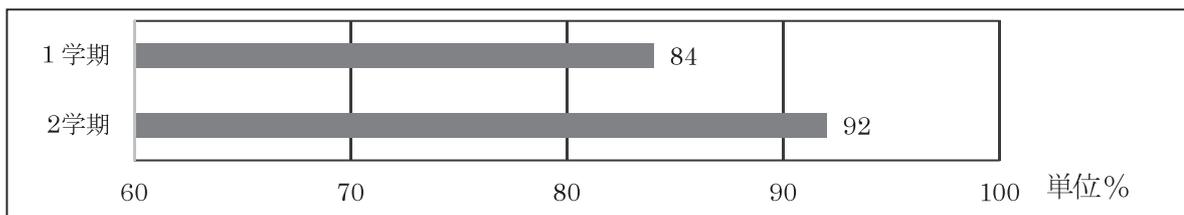
(知識・理解)				
	月日	分かったこと・ポイント	月日	分かったこと・ポイント
剣道の特性	10/14	対人性、氣勢 など	/	
高まる体力	10/16	瞬発力や俊敏な動き	/	

A4用紙1枚に、単元の中で行う評価を明確にし、授業ごとに生徒に記入させた。努力を要する生徒には、再度個別に指導し、総括的評価までに評価を繰り返した。

(2) 指導方法の工夫による生徒の変容

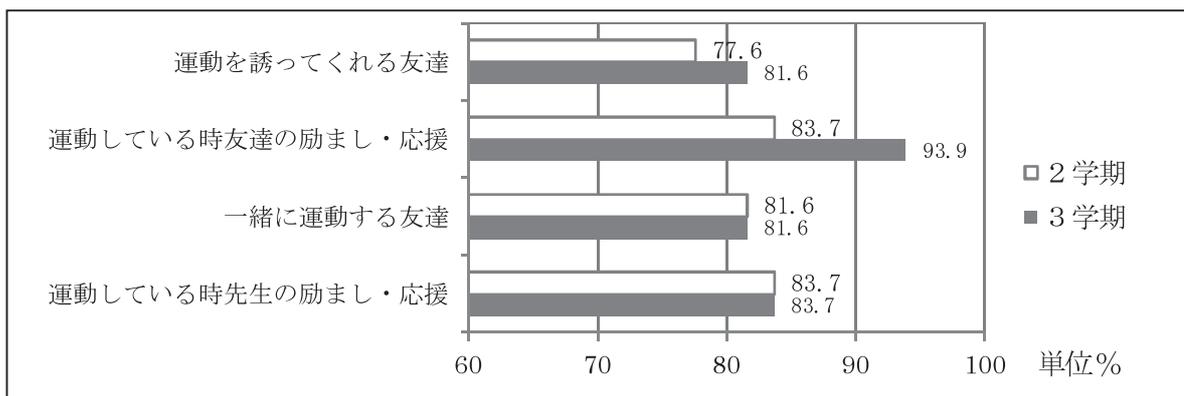
ア 授業評価1学期と2学期の変容(保健体育科)

「授業の中で、ペアやグループ活動など、仲間とかかわって学ぶ活動や場面がある。」



2学期の方が仲間とかかわって学習する場面が増えた。

イ 生徒の受容感

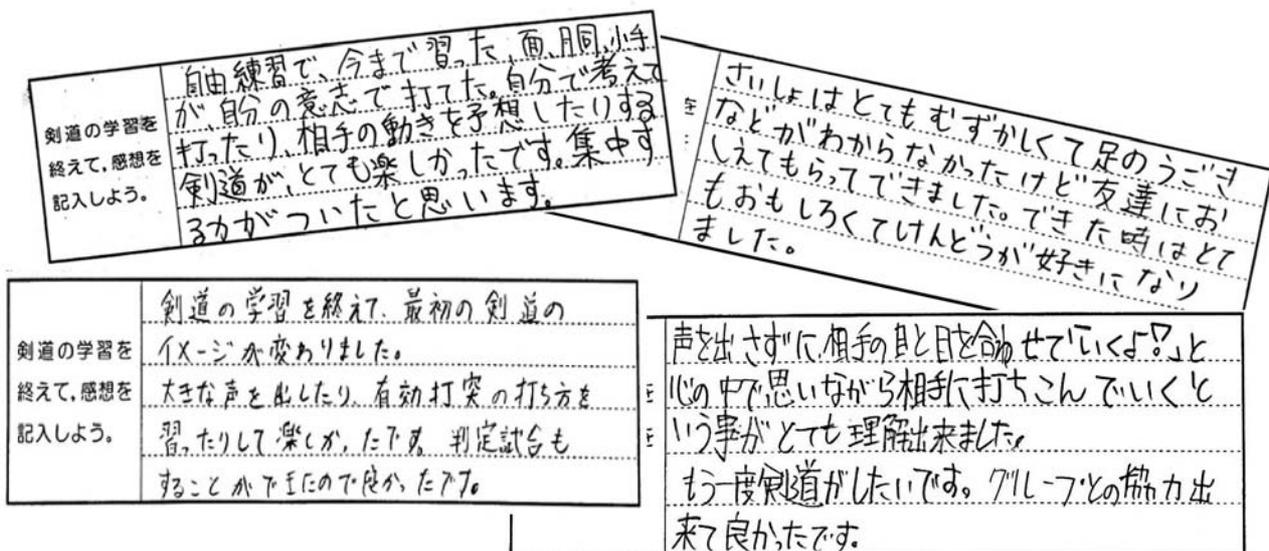


「一緒に運動しようと誘ってくれる友達があります。」「運動をしている時、友達が励ましたり応援したりしてくれます。」の項目の数値が上昇した。

ウ 剣道の授業について

1学期に行った体育の授業についてのアンケートでは、剣道未経験者が多く「興味がある」と回答した生徒は50%を下回っていた。また、「痛い」「防具が重そう」等のイメージを持っていた。しかし、授業後の感想では生徒の意欲が高まり、剣道を肯定的に捉える感想が多くみられた。

<生徒の感想 例>



5 成果と課題

(1) 成果

ア 指導内容、指導方法、学習評価を明らかにした指導と評価の計画の作成

今回の研究において作成した指導計画により、単元全体の見通しをもって計画的に授業を進めることができるとともに、毎時間の学習目標を着実に達成させていくことができた。特に指導目標と学習評価を常に意識することで、PDCAサイクルに基づく教師の授業改善にも繋がった。

イ 協働的な学習「かかわり合い」を活用した指導の効果

授業の導入部分等に行った剣道体験の運動は、剣道への興味関心を高めることに効果的で、生徒の感想には「はじめは、剣道は嫌でしたが、次の剣道が楽しみになりました。」とあり、技の習得にスムーズに発展させることができた。また、ペア・グループ活動、ICTの活用などの指導方法を、学習の段階に応じて工夫することにより、生徒は基礎的な技能を着実に身に付けるとともに、「これまで習ったことが自分の意志で打てた。」と、剣道本来の楽しさである対人性の面白さを味わうようになってきた。また、生徒同士が自然とかかわり合う姿も多く見られ、受容感が確実に高まるとともに、例えば「足の動きがわからなかったが友達に教えてもらってできた。」と「できる」ことを実感していた。

ウ 生徒の実現状況を把握し、指導に生かすための、学習評価情報を効果的・効率的に収集するための学習カードの工夫

診断的評価、形成的評価、総括的評価をそれぞれ工夫して着実に積み重ねることにより、適切な学習評価を行うことができるようになった。指導のねらいに沿って生徒の変容をしっかりと見とることで、きめ細かい支援もできるようになり、教師自身の授業改善にも活かせることを体得できた。

特に、発達段階に応じた学習をすすめて評価する中で、はじめは「できない」と思い込んでいた生徒も、技能面だけでの評価ではないことを理解し、安心して授業を楽しむようになった。

以上のことから、本研究を通して、教師が生徒の実態を踏まえ単元全体を見通して緻密に指導計画を立てることの重要性、仲間とともに主体的に学ぶ態度を育成するための指導内容や評価方法を工夫すれば生徒は「運動が楽しい」と思えること、さらにはそのことが「わかった」、「できた」と実感することに繋がることを検証することができたように思う。

(2) 課題

生徒の様子や授業後の感想には肯定的なものが多かったが、自己有能感についてのアンケートにおいては、1単元の授業の前後では明らかな差が見られなかった。自己有能感は、体育学習の蓄積によって生じる意識変化と考えられることから、教師は、3年間の年間指導計画に基づいて、学年及び各単元における指導と評価の計画を検討し、主体的な学習能力の向上、基礎となる知識・理解の確実な習得と思考・判断の機会のバランス、協働的な学びを促す学習過程の工夫等、実践と修正を繰り返すことでさらに検証を続ける必要があると考える。